

第2分科会 豊かな地域生活

《テーマ》 地域の力をPTA活動に取り込む取り組み

I 発表の概要

＜発表1＞ （北海道ブロック）

発表者 北海道立北海道東川養護学校 PTA会長 森 美樹子

テーマ 保護者・学校が連携した卒業後に向けた取り組み

～卒業後の豊かな地域生活のために～



1 本校の概要

近くに旭山動物園があり、有数の観光地にある。児童・生徒の大半が旭川市に在籍している。大半がバスで通学していて、寄宿舍を利用している児童・生徒は12名である。

2 本校PTAの概要

(1) PTAの組織について

- ① 事務部：運営総括、各種会議やPTA大会への参加、事務局だよりの作成など
- ② 総務部：環境整美、ガラスふき、バザー等の企画・実施、ボランティアバンク
- ③ 広報部：PTAだよりの発行、文集「みのり」発行等の企画・推進
- ④ 研修部：研修会及び見学会の企画・推進
- ⑤ おやじの会：夏・冬レク、環境整美、懇親会の企画・推進

(2) H22年度の主な活動

- うどんとデザート作りを行った。普段かかわることのない他の学年の親同士の間で交流ができてよかった。
- おやじの会主催「のろっこ号」に乗って富良野へ出かけた。父親同士の交流、夏休みのよい思い出作りができた。
- 校長杯ミニバレーボール大会。親と先生との親睦が深まった。
- ボランティア農園で活動。販売やキムチ作りを行い、ボランティアの人と交流できた。
- 韓国恩愛学校との姉妹校交流を行った。私立の特別支援学校で設備も整っていて綺麗だった。韓国の保護者と話ができよかった。

3 保護者と学校が連携して行う取り組み

(1) PTA施設見学

見学先については、保護者の意見をもとに、進路指導の先生と話し合ってから決める。

(2) 進路説明会

本校高等部や高等養護学校に進学する中学部の生徒、高等部を卒業して事業所に通所する生徒の保護者の他に、小学部からも参加があり、早い段階から進路を見通す機会となっている。

(3) 現場実習

高等部だけでなく、中学部の生徒も現場実習を年2回行っている。保護者は実習先へ見学に行くことで、普段と違う子どもの姿を見ることができる。

4 保護者と学校、事業所との連携について

地域のデイサービスの活用…よりよく利用するにはルールを守ることが大事。利用者に有益なサービスをしてきているが、保護者のニーズとマッチしないなど、より細かな配慮を希望する声もある。保護者の方が病気になって病院に行きたい時などに利用できるサービスがなく、困っている。

5 卒業後に向けての保護者や学校の役割

(1) 卒業に向けての準備

社会資源について学習をする、色々な社会資源に触れるなど、親も成長しなければいけない。何より重要なのは本人を中心とした支援のネットワーク作りを行うことである。

(2) 環境作り

卒業後に向けて、早い段階から、働く場所や活動の場所を見つけること、保護者の他にも安心できる支援者に囲まれて生活できる場所を見つけることが重要である。

<発表2> (石川県 北陸ブロック)

発表者 石川県立いしかわ特別支援学校 P T A 役員 表 和子

テーマ ボランティア養成講座(トライアングルクラブ)の実践



1 本校の概要

H18年度に総合養護学校として開設。初めは肢体不自由のみだったが、その後知的障害も受け入れている。児童・生徒数は増えている。H22年度から知的障害の生徒数の方が多くなっている。

2 本校P T Aの取り組み

肢体不自由・知的障害部門と一緒にP T A活動を行っている。一人一役で、全保護者が学年に応じた委員会に所属して活動をしている。P T A役員は委員会も兼任している。障害児の心豊かな地域生活の創造を目指すことを事業目的としている。

3 ボランティア養成講座「トライアングルクラブ」について

(1) 活動の始まり

H18年に学校周辺に募集活動をし、町会ごとに回覧板を回した。この地道な活動により、森本地区ボランティアグループが結成された。

(2) 活動内容

本校はP T A会議を年5～6回、土曜日に行っている。それに合わせ、役員会中の2時間、子どもとその兄弟の託児を、地域ボランティア・学生ボランティア、本校の教育活動支援委員にお願いし、楽しく活動している。

(3) 活動の流れ

始めにどの活動に参加できるか、調整するための募集を行う。ボランティア募集ポスターを地域ボランティアの人に郵送し、学校へはFAXで行う。その後、参加できる人の確認をし、ローテーション表を作る。人数を集約し、ペア決めを行う。PTA役員も、年に1回は役員会に出ずに、子どもの託児の方へ参加する。各回の参加人数は、地域ボランティアが10名程度、学生ボランティアは試験と重なると来なかったりするため、時期により異なり、1～20名程度の参加がある。ボランティアと子どものペア決めが最も重要である。基本は子ども1人に対して1人のボランティアがつくようにする。ボランティアが少ないときは、知的障害が重い子を優先する。自閉症が強い子は2人のボランティアでみたり、2時間継続してみたりするのではなく、30分ずつローテーションをして複数のボランティアでみるように工夫している。その子の特徴や注意事項を書いたフェイスシートを用意しておき、顔合わせの際に渡す。活動後、ボランティアの方に一言感想を書いていただき、次回の参考にする。最後にお礼の手紙を書き、反省会も行う。

(4) 活動の反省・課題

- 昨年度、ボランティアにアンケートを実施したところ、自分の担当が数人決まっていた方がよいという意見が出た。
- 自閉症の男子生徒が、第1回目に脱走してしまった。その後、ペア決めに配慮した。回を重ねることにより見通しが立てられるようになり、3回目は、全く問題なくなった。
- 最後まで見通しが持てず、活動に参加できない子もいた。その子の場合、2時間、自分の好きな活動（階段の上り下り）をしていた。

(5) 成果について

- 地域ボランティアの中には6年間欠かさず参加してくれる人がいた。学生ボランティアのリピーターが増えた。
- 毎回反省をきちんとしたことで、工夫することができた。ボッチャは重度の脳性マヒの子が唯一参加できるオリンピック競技であるが、ボッチャをすることによって、障害がある子と健常者が楽しく活動でき、相互理解ができた。
- アンケートをとることで、ボランティアの方の本音が聞け、課題が見えてきた。

(6) 今後の課題

- ボランティアの新規開拓をすること。
- 先輩保護者のボランティアグループを結成すること。
- 役員の負担軽減のために、きちんとした引き継ぎを行うこと。

4 まとめ

学生ボランティアの中には専門学校の学生もいるが、障害者への理解や、関わった経験が少ない人が多い。学生ボランティアは、活動が盛り上がる時は良いが、つまらないとため息が出てしまうこともあった。ボランティアの方に無理のないよう、負担をかけすぎないようにペア決めに慎重にすることや、活動内容を楽しくすることで、学生のリピーター増加につながるということが分かった。

トライアングルクラブを6年間続けることができた要因は、子どもの笑顔と、役員の熱意、そして出会いに感謝する気持ちがあったからである。卒業生とボランティアさんの再会・訪問学級生の参加に心が温まった。

II 質疑応答

質問①-1

現場実習の時に役場から仕事をもらってやっていたというが、役場以外で、どれくらいの事業所から仕事がもらえているのか？

質問①-1

最近になって、地域との連携を模索しはじめたばかりである。以前は、農家が多い環境であるため、農家の手伝い、公園掃除、または旭川市内で現場実習などをしてきた。それを地域の人が認めてくれ、こういう仕事がありますよと話がいただけるようになった。地域の事業所は今後も開拓していく。

質問②-1

看護師が行事に参加しているという話について、休日や野外での活動にどのように参加していただいているのか？看護師を雇うためにどのようなことをしているのか？看護師がいないと親にべったりしてしまう子がいるので、看護師に活動に参加していただいたほうが良いが、協力を得るのが難しいので教えて欲しい。

応答②-1

金沢子供福祉医療センターへは肢体不自由児の訓練で通っている子がいる。入所し、そこから学校に通っている子もたくさんいる。看護師の土曜日の参加はボランティア精神のみ。毎日通っている生徒が「お願いします。」と言って頼む。1年間の予定を決めてお願いしている。看護師だけでなく、活動中は、親がいても違うボランティアにみてもらうというようにして、親にべったりすることがないようにしている。

質問②-2

ボランティア活動に関して保険加入などの費用がかかると思うが、費用はだれが負担しているのか？

応答②-2

P T A 会費から支払いをしている。昨年度は助成金があった。

質問②-3

始まりのところで、何か必要性があって、始めようとしたのか、スタートのエネルギはどこからきたのか？

応答②-3

道路を挟んで一步出たら住宅街という環境で、地域住民と関わりを持ちたいという気持ちがあった。始めたのはその時の会長とP T Aの熱意だと思う。個人的には、開校が3年遅れたのは地域の反対があったのではないかと考える。P T A役員会の間、誰かに子どもを見てもらいたいということもあったと思う。

質問②-4

ペアリングは誰がするのか？

応答②-4

私（発表者）が1年間かかわり、ボランティアと子どもの特徴をよくとらえておいた。

質問②－5

学校の先生はどのようにかかわっているか？

応答②－5

学校を開放したり、備品を貸したりしてくれている。ボランティア活動そのものに参加することは現時点ではない。

Ⅲ 研究協議

- おやじの会では、3月にもちつき大会、2学期に高尾山の山登りを予定している。休日・放課後の余暇活動をどうするかが課題である。学校と地域が連携して協力して取り組める活動にしないと、その場限りで終わってしまう。
- PTA事業でなく、学校の授業であるが、喫茶店をしており、地域の方に学校に来て利用していただいている。喫茶店は月に1～2回、生徒が運営しており、登り棒を立てたり、回覧板を回したりして宣伝している。平日だが、地域の方がたくさん来てくださる。生徒を見て「がんばっているね」「上手だね」と言ってもらうことで理解が深まっている。コーヒーに生徒が作ったクッキーなども添えて1杯200円で販売している。以前、地方テレビで紹介されたことがある。本日も24時間テレビで紹介される。
- 地区の住民であるボランティアの方が日曜日に学校に来て、学校周辺の清掃活動を行っている。市が行っているボランティアの活動の中に、本校の清掃活動を取り入れてくれているためである。年1回であるが、本校生徒の理解につながるのではないかと思う。
- 冬に豚汁大会を行った。この夏は流しそうめんをやる予定である。PTA間の交流が減ってきたと思い、行事を設定した。今後は地域の方に参加してもらいたいという希望があるが、地域との連携は難しい。伝統的な学校なので、どう声をかけていいか、駐車場がないのはどうしたらいいか、教室の利用など考えると、一歩が踏み出せない。近くに新しくできた特別支援学校は地域が協力的で、喫茶店には行列ができている状況である。
- 開校12年目の学校。開校当初から地域に開かれた学校だったようで、ボランティアの方も地域にいる。イベントには必ず地域に声をかけて、来校していただく。運動会の運営にもボランティアに来てもらう。ボランティアクラブもある。毎年来てもらうので、ボランティアがいないと成り立たないくらいになっている。夏祭りには、ボランティアに焼き鳥の屋台を出していただいて好評だった。地域とは何かと考えると、卒業生やPTAのOBも取り込んで何かできないかと考慮中である。
- 昨年、地域の自治会の方々の花を植える活動に、本校も参加させてもらえないかと話を持ちかけ、生徒・保護者・先生で参加した。同じ活動に、数日前に健常者の生徒も活動に参加していたため、最初は期待されていなかったが、活動が予定の倍以上進んで感謝され、来年もお願いしますと頼まれた。やればできると認めてもらえれば次につながる。
- 積極的に声をかける、失敗を恐れず思い立ったら行動することが大事なのかと思う。

IV 指導・助言

＜助言者 地域相談支援センター サポートパル やちよ

相談支援専門員 原田 みち子＞



自立支援法が施行され、相談支援が市町村の必須の事業となった。相談支援事業所という立場から話をしたい。旭川は人口36万人、高崎が37万人で人口規模が同じなので親近感を持った。生活の基盤は、生活の場、日中活動の場、余暇の場の3つである。日中活動の場は大事である。保護者の方には事業所の見学にたくさん行ってほしい。事業所はそれぞれ違うので、実際に見ないと分からない。学校の実習だけだと、行ける事業所の数は限られてしまい、選択の幅が狭まることになる。夏休み、冬休みなどの長期休暇を利用し、単なる居場所としてではなく、体験の場として日中一時支援を利用し、さまざまな事業所に行ってほしい。

学校から次の日中活動の場につなげるとき、地域の相談場所にもつなげてほしい。これは学校だけでなく、保護者にもお願いしたい。必要な情報が比較的集まる場所でもあり、何か問題が起きた時、継続的にかかわることができる。早めに相談事業所の存在を知っておいてほしい。親から離れ、好きな日中活動をすることが子どもにとって良い経験になる。活動の場を広げたり、関わる人を増やしたりしていくことが大事。何が好きで何が楽しいかわからない子どもも多いが、それは体験していないからである。自分の好みは体験してみないと分からないため、早い時期から様々な体験を積み重ねてほしい。個別サービスとしては移動支援が主だったサービスだと思うが、ただ外出するのではなく、目的を持って利用して欲しい。例えば支援員の方と一緒に、ボランティアに行くという体験や、地域の事業所以外の場所に体験に行くことなどがある。ネットワークをつくるのが相談支援事業所の役割である。

トライアングルクラブはとても良い活動だと思う。地域ボランティアと学生ボランティアの2本立てというのが良い。地域ボランティアが継続してかわり、安定した基盤を作ってくれるというのは安心できる。学生ボランティアは素人ではあるが、子どもが喜ぶ。高崎には、似たような形の余暇支援を行っているNPOがある。事務局の負担は大きい。学生のリピーターを作るためには、ボランティアの人が参加者と同じように楽しめるようにすること、みんなが楽しめる余暇を作ることが大切である。素人のボランティアをつけることに対して親が心配することがあるが、学生ボランティアの良い面もある。普段引きこもっていた子どもでも年1～2回、余暇活動だけには参加し、それを積み重ねることで外に出られるようになったという例もある。親が「何にもできないんです」という子であっても、余暇支援に行って、慣れない学生との関わりの中で、本人がしっかりすることもある。余暇支援が生活する力を伸ばす。素人のボランティアの方との関わりの中では、不自由な思いをすることもあるが、不自由さを乗り越えた楽しみもある。地域の、知的障害とは何かを知らなかった人が、知的障害の人と楽しく関わっていくことにより、徐々に理解者が増えていき、自然と支援者が増えることが理想。

地域とつながっておくことは災害時こそ重要である。停電の時や、ガソリンが無い時など、離れている事業所は頼りにならない。ケアホームも同様である。例えばケア

ホームで茶話会を行い、地域の方をケアホームに呼んだり、地域の活動に出向いたりすることを繰り返しているうちに、理解が得られる。ケアホームを作る時も、反対の声があったりするが、障害者についてよく知らないから反対されるのであって、怖くもなんともないと知っていただければ反対されない。ネットワーク作りがポイントである。

ネットワークの中に、地域の相談支援事業所も巻き込んでほしい。障害者自立支援法は廃案となったが、良いところもあった。地域自立支援協議会という場が設置され、市町村と相談支援事業所と一緒に地域の課題を検討する機会が確保された。市町村が決めるだけでなく、相談事業所が提案したり、意見を言ったりする場ができたのは、大きな成果である。障害者自立支援法廃止後も、この協議会は市町村の必須事業として継続することになっている。地域自立支援協議会は、地域のニーズを検討するところである。高崎市の例では、子どもの療育機関が不足していたが、4月にこども発達支援センターが設置され、様々な課が連携するようになり、改善されてきた。他にも、移動支援サービスは、通学や通所の送迎には利用できないという規定だったが、自立を目的として、3か月以内なら通学や通所に利用してもよいこととなった。また、各種パンフレットやガイドブック作りにも取り組んでいる。

日中活動、ボランティア、PTAの活動など、どんな活動であっても、楽しいということが大事である。楽しい活動が自発性を育てる。